

## 本田一弘歌集『あらがね』

### 屋良健一郎

#### 「土地讃め」の力

二〇一四年以後の歌を収めた第四歌集。郷土福島への想いが溢れている。

・会津嶺の国の稲穂のわうごんの波いどどしく立ちにけるかも

会津嶺は福島県北部の磐梯山の異称。万葉集にも詠まれた。上句が「波」を導く序詞になっており、「の」の連なりは波のような心地よさを生む。和歌を思わせる格調高さもあり、郷土への「土地讃め」の歌だ。

- ・ 田ん坊とよべば田んぼのわらふなり水取雨を浴みつつわらふ
- ・ 集団で登校をする七人のななつの影をよるこぶ田の面

・ しろたへの手があらはれて苗といふあをきいのちを植糸にけるかも

「田ん坊」と呼ぶ時、田は作者の幼馴染みのような存在となる。二首目、田の表面に生徒達の姿が映っている。登校を見守る田

はまるで地域の長老だ。三首目、「手」は人の手だろうが、もっと大きな存在と読みたくなる神秘性がある。身の周りの土地を肯定的に詠む歌が読んでいて心地良い。

・ おほははの髪の白さの雪つもる福島やはき繭玉となる

・ 少年の吾が食ひし雪 中年のわれのみぬちにふりつもる雪

・ 垂直に雪はふりつつ現し身の肩にし触れむ死者の手の平

雪の歌も印象的だ。福島を包み、守る「おほはは」の始原性。二首目、少年の頃に食べた雪が現在の体内で降っている。単に懐旧の歌というよりも、土地との結びつきの強さを感じさせる。三首目には死者が現われるが、死者の歌もこの歌集に多い。死者も含めての郷土、土地なのだ。

そしてこういった歌が震災後の状況と切り離せないことも忘れてはならない。先に挙げた「集団で」の歌の前には「南相馬市小高区の田の水光り七年ぶりの田植糸はじまる」という歌があるし、「少年の」の歌と同じ連作には「放射性物質ふむ雪なら

む白き時間がふくしまをふる」がある。苦難を直視した上での「土地讃め」の力。

・ これ以上何をしのべばいいのだと信夫の山が磐梯に問ふ

「信夫の山」は「忍ぶ」を連想させ、和歌では「忍恋」の題などで詠まれた。古典和歌の世界には無かった新たな「しのび」を現代人が福島に強いてきてしまった。

・ 基地といふつちは要らない沖繩のそらにつながる福島のみ

・ ウェールズ語喋る罰とぞ子の首に掛けられてぬし Welsh Not

・ 都よりみれば東北 東にも北にもあらぬわがうぶすなよ

福島を詠いつつ、同様の立場に置かれた人達へも目を向ける。基地を「つち」と作者が呼ぶ時、「基」という字が「土」を含むことに気付かされる。辺野古の海を埋め立てようとする土。土のような当たり前の存在として島を覆う基地。その「土」の欺瞞。さらには自らの言葉を否定された海外の人達へも想いを寄せる。これらの歌には連帯の兆しと、近代的な価値観を問い直す鋭さがある。私達の今を問い直す視座を、本書は提示しているのだ。